

金が入った封筒を入れる。それから浴室に行つて床に落ちたナイフと写真を拾つた。赤錆色のソファに置かれた比嘉のセカンドバッグを取つて、テーブルの上に置かれたままの写真や現血でバスタオルが汚れた。痛みをしらえて下着とジーンズをはき、Tシャツを着た。

壁にかけられている。それを取つて羽織らせると、カツヤは自分の体を拭いた。性器から滲む声に従つて体を動かし、衣服を着け終えた。小柄な少女のものらしい黄色のヨットパークが脇に落ちていた下着やTシャツ、ジーンズを着けさせた。ソファに座つたままマユはカツヤのマユの体を拭いた。急いで逃げなければならなかつた。マユの肩を搔すつて起つて、ベッドの湯気が漏れないように、浴室のドアを開めて、カツヤは洗面所の棚に載つたバスタオルを取り、まる。カツヤはマユの体を抱き上げ、浴室の外に出してソファに寝かせた。

背中にのじらめ道わせると、入れ墨部分の皮膚がわずかに起伏を作り、指の間に満がた。眞に襲われ、カツヤは水滴の滑いた七色の色彩を見つめた。鳥は本当に生きていて、見つに見え腕に抱いたマユの背中から、虹の鳥がゆりとり羽を動かして宙に浮かぶ。一瞬そつとう幻せた理由が分かるふうな気がした。

すでに息絶えていたが、それでも、今でも起きあがつてきそうな気がして、マユが熱湯を浴び混じり、カツヤは息苦しげになつた。熱湯に打たれた比嘉の顔の皮膚は白くやけ始めている。深い切り込みがあり、流れ出した血が湯を赤く染めている。立ち昇る湯気の中に血の臭いが

浴槽を見ると、温度を最高にしてた湯が、蛇口から比嘉の顔に降り注いでいる。横向いた首エの手からナイフが落ちる。カツヤは前に倒れるマユの体を走り寄つて抱きこめた。

女と松田を見つめたまま後ずさり、浴室をのぞいた。湯気の中に立つ裸のマユが白く光が包んでいた。右手に握られたナイフが輝く。マユが一步踏み出しだとき、刺される、と思つた。マユの手からナイフが落ちる。カツヤは確かめる気になれなかつた。

少女の体は繃を繰り返し、泣く声が小さく聞こえます。テレビのスイッチを切ると、静かにえりた部屋にして、一も一もして、音が立つ音が聞こえます。音は少女の体のどこかから聞えてくるよつたが、カツヤは確かめる気になれなかつた。

血の跡でアッシュ黒へ染み込んで広がつてつる。血はまだ動きを止めないが、機能を停止した脚の間で繃つてつる。人影が見えぬままで腰にマスクがねじ込まれ、あふれた血が灰休止線でくわしく少女に食ひだ。カラオケマイクの黒いコードが首に巻きつけられ、開いた脳の一部が見える。枕で様子を確かめたかったカツヤは、ソーナンソーフマの間に同じく、血の臭いの方が生きしかつた。

藻の臭いが部屋に立つかつてつる。緩んだ肛門から排泄物が漏れていたが、それよりまた脳の一部が見えてつる。枕に血のついたビデオカメラが転がり、浜辺に打ち上げられた海

血が脛でじるのか股の部分がじへじへと濡れて気持ち悪い。ホテルで起つたついに、まだ列が見えただけだった。後を追つて来る者はいなといひとまず安心すると、性器の痛みが甦る。信号待ちで止まつたとき後ろを振り向いた。ホテルは橋に隠れて確認できず、並んでいる車しかも知れないと考ふると、不安と焦りが増してくへ。

ターゲットを見つける従業員に不審に思われるかわからぬといつた。他のスミマツの車の運転手は仕事を終えて帰るだけ見える。黄色いジャッパーが、監視カメラのモニターの行列に並ぶ。助手席のエコノマードアは開けて目を開けてくへる。その姿を見るといつた。スミマツが散らして橋を上つていく大型トラックを追い越し、下りの加速に注意しながら赤いタクシータクシを踏み込み、走り出していく。ドアを右に切り、北向きの車線に入った。排気ガスの大橋に入る時に、左折して曲がるか判断に迷つた。信号が黄色に変わるのが見てア

て、車を抜けて出た。最初の十字路で右にハンドルを切り、客待ちのタクシーや並んで、派手な建物がありテル街の風景が、映画のセリフのように作り物めき、今横の壁に沿うる。車内の時計は七時一十一分を表示してくへた。外は暗く乗せると島いで運転席に乗り込み車を出した。駐車場の出口で左にハンドルを切った。ハーフの内側に比嘉のセカンドバッグを隠した。駐車場に出て車の鍵を開け、マコを助手席に。比嘉や松田と一緒に来て、先に帰るのはあへていいだつた。抱き寄せたマコのヨットターゲットから降りて玄関口ビーチに出て立つき、カツヤは隠しカメラの方を見て右手を挙げた。カツヤはアドバイスを聞いて廊下に出たとき、マコの手を引いてエレベーターに向かつた。

中で見てみるとオの映像のようつた。性器の痛みだけが生き残り現実味を持つつていた。それ抗つて体を動かすだけといつた。目前で起つてくへるといつたが、深い酔いつぶ身真面目な少女の姿を見て、袁れみは生じなかつた。重い疲労感が全身に広がつて渡す。松田や小柄な少女の姿を見て、袁れみは生じなかつた。重い疲労感が全身に広がつて、カツヤは湯を呑み、浴室を出てアドバイスを聞いた。

比嘉の顔に睡魔が浮かぶといつたのが記憶になつた。浴室には入ってがほほんが寝てゐるが、いつたのと聞こえていたが、じつしてはなかつた。浴室には入つてがほほんが寝てゐるが、いつたのが記憶になつた。天井を回して揺れて、比嘉の体は漸く薄汚れた。お風呂で浴槽から水を出しながら十数年近くカツヤを隠りつけた。浴槽が浴槽からお風呂へ入れて、水面を叩く音と排水口に流れ込む音が響く。もは返る蒸気の中で、

現実感を持ちながら走行する。横を見るとマユが息をしており見て見えて、バーから車線を一一台が走り過ぎていく。ホタルから警察に通報が行つて緊急配備が敷かれていた。道の反対側からナメの音が聞こえ、赤い光が回転しながら近づいて来る。脳をつかんで握る。首を左右に動かしたのを見て安心し、信号が交わり発進した車列に対する機会がある。

れる。やがて数かれていくかもしれない。やがて見えると気が急ぐが、前が詰まつて追いかけた。カツヤは目の前にひらひら比嘉の顔を追いかけていたが、自分の胸の中でひがみ、カツヤは目の方にひらひら比嘉の顔を追いかけていた。赤く剥けた皮全ては運び。

・膚から蒸氣立ち、酸素欠乏の魚の口が開く。耳の穴の奥に消えていった火が、自分の頭の中ひがみ、カツヤは目の前にひらひら比嘉の顔を追いかけていた。赤く剥けた皮全ては運び。

五八号線に出て北上し、道路沿いにある遊技場の駐車場に入る。ホタルを出でから一十分近くにして、一人だけ逃げる気にはなれなかつた。

てタクシを使おうか迷つたが、マユがじつじつ反応を示すからならない。マユを置き去り間に電話したかもしれない。警察に捕まるよりも、彼らに捕まる方がまづかつた。車を乗り捨て、比嘉は死んだ、と声に出して言つた。ホタルの従業員は、警察よりも先に比嘉や松田の仲間で目も虚ろだったが、カツヤが支えると意外とかりした足取りで歩ける。ジーンズの前の前の方に血が滲んでいるのをセカンドバッグルで隠し、遊技場の入口に向かつた。

は呻いた。しばらく痛みを静めながら、助手席側に回つてマユを降ろした。マユは蒼白な顔で目も虚ろだったが、カツヤが支えると意外とかりした足取りで歩ける。ジーンズの前の前の方に血が滲んでいるのをセカンドバッグルで隠し、遊技場の入口に向かつた。

建物の屋上に据えられたネオンが、原色の光を目まぐるしく走らせていて。鏡を複雑に組み合わせた装飾が玄関の壁や天井を飾り、白色灯の光が乱反射している。県内に十店舗以上店舗でいる本土資本の遊技場で、大型店が並んでいる五八号線沿いの遊技場の中でも威容を誇っていた。半年ほど前に開店したこの店に、一人の兄が入り浸つていてもカツヤは母か娘ともが数名、床に落ちた玉を拾つたりしながら通路を歩き回つていて。五歳くらいの女の子が一人、自動販売機の上に設置されたテレビを見上げて立つていて。子どもの頃、父の横の台座つてスロットマシンのバーを引いていた自分の姿が思い浮かんだ。いいつ所子供を連れてきて、ほつたらかしこにしていも親が許せなかつた。だからといつていつにかかる

前立つた。

聞いていた。壁の鏡に何重にもなつて映る自分とマユの姿を見ながら、カツヤは自動ドアの前立つた。床に落とした玉を拾つたりしながら通路を歩き回つていて。親に連れられて、暇を持てあましていて、臭いが混ざり合つて沸騰していの中を、一人の兄を探して歩いた。プライバードの下さらされた窓際に並ぶ椅子は、空き台を待つ客で埋まつていて。親に連れられて、暇を持てあましていて、椅子に並ぶ椅子は、空き台を待つ客で埋まつていて。親に連れられて、暇を持てあましていて、

けたましく流れれる音楽とバー台を告げる男の濁声、金属音と電子音、タバコや埃の前立つた。

マユと一緒にホテルに行かへと思つてゐるが、宗明は笑つて目配せし。カツヤの腰を叩いた。カツヤは苦笑して見せ、車が見つからぬといつても早く移動しなければ、と思つた。なかなか宗明のそばから離れられなかつた。宗明は車のナノバ一と駐車していく場所を告げ、コイさんを三枚取つて台に入れた。それを見てカツヤは、やつれた横顔を見つめ小びへつはずい

「今度はおまえが崇明が言ふ、さうに笑ひかねる。無反応の口で崇明が氣持すやうな事

「識しながら話を切りました。俺の車は今、故障してて……」「すまないけど、一時間くらい車を貸してくれないか。俺の車は今、故障してて……」宗明はカバンヤとエキを交互に見ながら、ズボンのベルトに掛けた鍵の束から車の鍵を抜き取った。

台の上に立つて、朝食事中と、おもむろに入つて、制限時刻を見ること少し前に台を離れた。トマトの器の中に入り、カツヤは少し気持ちが和らぐの意積み上りていた。調子いいね、とかヤシが言ふと、朝からだらが打ち込んで、やうど取り戻したり。二人とも珍しく大勝ちでいた。口の器がたる箱を宗明は因つ、宗申は因つ

「飯を食いに行つてゐる」

長兄の崇神の御名を口へ聞きてとて、三三の御名を口へ示す。

タダ兄は?

アキラ。今までの時以来で一ヶ月ぶりたりたつ。会の時は監の時以来で一ヶ月ぶりたりたつ。
十歳やじて薬師堂へ参った事がある。毎年何年か前に薬師の光沐浴して以來の事
これがヤソカヒト思つた。無精鬚がいけて頬の陰を深へして、今は二十代半ばの事
である。自分が殴られ続いた大変な事、今自分と同じ事をしてらるのか
手を置へ、ひへひへといじ体を震わせてカツヤを見た。怯えたよつて規線がカツヤと横に立つて
やや驚いて声をかけたが、回転するドームを見つめて集中してから明は気がつかない。肩

所で、次兄の宗明を見つけた。
「お前がいつていたおのの間を好みの目で見てながら歩き、玄関ホールからかなり離れた場
所の方へ気がついた。兄たゞの気晴らししかば。椅子には座らなかつた。背中合わせ
西はハチローナービスローリーとコロナに分かれていたが、庄園的にスロット
に入った。

「アーティストの才能を發揮するための道具として、筆記用具は不可欠だ。」

警備ボックスタスの中から初老の警備員が見ていた。兄たちと顔見知りになつていいるはずで、カツヤたちを注視していいるのは明らかだった。カツヤは平靜にしてことを進めようつに努めた。いつも一人で行動していく兄たちは車も共用していく、外側はきれいに磨かれていたが、中はタバコの吸い殻や弁当ガラを入れたスープの一袋が散らかり、異臭がこもつていて。セカンドバッターアの前に置き、ゴミを両手に持つて、警備ボックスタスの横にあるクズ籠に入れた。車に乗込みもどき、傷の痛みに顔をしかめずにおられなかつた。警備員の視線を感じながらエントジン

ビは畠畠の集会のユースやせたやつていた。
て玄関に向かつた。玄関ホールまで来ると、幼い女の子はずつとテレビを見上げていた。テレビ
返してから。その向かいに兄が小さく見える。もう全では遅かった。カツヤはマユの手を握った
がいる場所と自分がいる場所がはるかに離れて、自分はひとつ一度と兄たちがいるところに戻
れないのだ。カツヤは立ち止まって振り返った。満員の客は自動人形のように同じ動作をくり
返してから。その向かいに兄が小さく見える。もう全では遅かった。カツヤはマユの手を握った
て玄関に向かつた。玄関ホールまで来ると、幼い女の子はずつとテレビを見上げていた。レ
ビは畠畠の集会のユースやせたやつていた。
玄関を出て駐車場を歩いていくと、感傷に浸つている場合ではないといつづりが込み上
げてきた。広い駐車場を照らす照明の下に数百台の車が並んでいた。朝一番に来る兄たちは、
いつも警備ボックスの近くに車を停めていた。教えてもらつたナニバーの大型四輪駆動車に近
くと、濃い緑の車体にネオバが映り、点滅する光が歪む。カツヤは駐車場全体の様子を確認

宗明の姿を目に焼きつけた。幼い頃から、一人の兄に遊びに連れて行ってもらひた。父の背中を押して狭い通路を歩きながら、あの頃何でもできる英雄の子に見えた。しかし、実際の人は、優しいが気の弱い、勉強も仕事を集中して続けることができない。かくして、兄たちが一度も定職に就かず、女めあいもめあいへんがねいませは、遊技場に入り複雑な兄たちを、カツヤはずすと馬鹿にしていた。アパート管理の名目で父から渡された金を頼りに、豚のよつた生活をしていくと蔑んでいたが、兄弟の嫌悪の底には、自分自身への嫌悪があることに気がついた。

「アーティストの口座は、おまかせください。」
「アーティストの口座は、おまかせください。」
「アーティストの口座は、おまかせください。」
「アーティストの口座は、おまかせください。」
「アーティストの口座は、おまかせください。」

が近づいてくる。アタセルを緩めながら赤道側の車線に移動する。パトカーは猛スピードで追跡からサイレンの音が聞こえる。パトカラーナーのやべと、赤色灯を回転させたパトカー。カツヤは鋭い爪を持つた昆虫が首筋を這つよつな感覚を覚え、思わず手で首を払った。細い指。その指がカラオケマイクを握りしめ、小柄な少女の性器にねじ込むところを想像し、マユはアマに体をもたせかけたまま、すっと目を開じていい。腿の上で組み合わされた両手の爪を鳴らし、急ハンドルを切って追い越していい。アタセルを踏み直しながら助手席を見ると、フロントガラスの前に現れる。カツヤは思わずブレーキを踏んだ。後続車が激しくクラクション。耳の奥に吸い込まれていった火。血で染まつた湯の中で煮え、揺れていった顔が、突然浴槽に向けに倒れた比嘉の姿が目に浮かぶ。赤くただれた顔や切り裂かれた首。肉の焼けがら、やまびらなければ何も変わりはない、といつ言葉を反芻する。はさんで左右に伸びている。闇に包まれた空を米軍機が着陸する。頭上を圧する轟音を聞きながらの憎悪を駆り立てる。沖縄が報復を受けるならおひらい。オレンジ色の誘導灯が道路を一体でもいいから本当にそれぞ自らに思ひ立たせ目で見たら、思い切り笑い飛ばしてやるの。それがアメリカの憎悪を駆り立てる。今に目飛び込んできやうな気がする。た丸い腹にだらりと垂れた小さな足。八十キロ近いスピードで片側二車線の道路を飛ばしながら、そいつ死体の一つが、今まで目に飛び込んできやうな気がする。

木横目に見ながら、米兵の子じもやひやもやつてヤシの木に吊してやればいい、といつ比嘉の言葉が思い浮かぶ。針金が首に食い込み、髪血した顔は倍以上に膨れ上がっている。張りつめたかっただけ。対向車のライトと外灯に照らされたヤシの木に、小さな体が下がっている

再び五八号線に出て、北上を続ける。嘉手納基地の前を通るととき、中央分離帯に並ぶヤシの木を横目に見ながら、米兵の子じもやひやもやつてヤシの木に吊してやればいい、といつ比嘉の言葉が思い出された。検問にあつたときには特定されないよう、ひやかに限りのことはしておらず、生えた草むらに捨てた。車に寝込み、痛めに耐え、ガゼを当ててテープで留める。それから脱がせ、緑のウエーブブレイカーカーを肩にかける。着替えた衣類は紙袋に入れ、空き地の隅に買つたばかりのエバーハーバーノウエアに着替えた。マユを起して黄色いパーカーを脱いで性器を消毒する。傷口に優しい薬を塗り、ガゼを当ててテープで留める。それから車に戻つて荷物を後部座席に置き、カツヤは宜野湾市まで車を飛ばした。途中、薬局で消毒液やガーゼ、鎮痛剤を買って、ロードショートセントー近くの空き地に車を停めた。シングル万余りの金が入っていた。それで支払いをさせた。

カーケーを追加でカウンターに置く。比嘉のセカンドバッグには、カツヤが渡した封筒以外にも十下着やトートバッグアンドショルダーバッグ、セーターやソックス、セーターを貰い、防寒用の濃い緑のウエーブブレークメートルほど離れた量販店の駐車場に車を入れ、マユの様子を見た。ドアにもたれて

画面に基地が広がっていた風景が変わり、嘉手納警察署の前にさしかかる。検問が行われてはいけない。カツヤは車のスピードを落とした。マクドナルドの手前に米軍払い下げ用品店があった。右折して駐車場に入り、坂道を下りながら遠へてマクドナルドの赤と黄色の看板を目にして、カツヤはなにかっただ。気が動転した中でのじつの判断であつたことはいえ、あって北に向かう選択をしてから、マユを置き去りにして、ホテルからまっすぐ空港に向かって歩いた。それはたんなるスムーズな車の流れに乗り、いつ自分が通りぬける。本気で逃げようと思つたのにならぬ。しかし、すこべりやつて自分への嘲りが込み上げる。少し緊張が柔らかいた。スマースな車の流れに乗り、いつ逃げおおせるのでは、といつ気きみじみのほほりながら走り過ぎ、嘉手納ロータリーのカーブを回って読谷村に入ったとき、

が痛むのじらひ、カツヤは車のスピードを上げた。助手席で眼を離さず正面のドアの外を見ていた。這い回る感覚に襲われる。カツヤは前方に遠ざかっていく赤い光を見つめ、徐々にスピードを減じてく。全身の鳥肌がなかなか消えない。肌寒さを覚える一方で、体の奥に熱の塊

入った。店には以前、ナップやキャバン、工具など買っていた。倉庫を改築したよな店内には、米軍基地から流れてきた軍服や階級章、薬莢、模擬弾、ナイフ、野戦用のテントや寝袋、携帯食料などが所狭しと並べられ、防弾チョッキまで置かれていた。カツヤは車の入口の上に置かれた翼長が三メートル以上ありそつた戦闘機の模型を見上げた。入口には店の入り口の上に描いた星条旗をペンキで描いたジユラルミンの増槽タンクが、ミサイルを模して立たれていた。助手席でマユが眼についているのをもう一度確かめながら、カツヤは店内に立たれていた。最後に磁石と大型のヘンチ、万能ナイフとアーマーナイフを一本ずつ買って車に戻った。カツヤは荷台に荷物を積み込み、予備タイヤのついたドアを開めると、震が起つた。カツヤは深く息を吸つて、ゆっくりと吐いた。Tシャツだけでは肌寒いほじ、夜気は冷えて温ん

進めるかは分からなかった。赤い車が入って森の奥に適当な場所を見つけ、テントを張りて米軍演習場の中に入りました。そこで、山道を車で走りながら金網を切断して水と食糧が足らぬ状態を嘗めました。それが見えたとき自分の願望も現実逃避にすぎない。11月の夜は、外灯の明かりで見える星は少なかったが、澄みきった夜空が広がっていました。森の奥でカツヤは車に乗り込み、隣のマクドナルドの駐車場に移動した。でさるだけマコと一緒に行動しない方がいいか、と思った。眠り続けていたのを見て、カツヤはセカンドバッグを手に上がり出た。今行場所はヤングルの森しかなかった。

かつた。張り出した屋根の下はテラスになっていた。注文した品物を外で食べられるといつて一人で店に向かった。入口の横に立っている大きなビロードの人形の表情と手を挙げている仕草が、妙に薄意味悪くなる。テラスには子供の遊び場があった。コインを入れると動く乗り物が人口の近くに置かれていたアメリカ人の夫婦と沖縄人の家族が、白いプラスチックのテーブルに座つていて、その前に麦藁色の巻をした幼い姉弟が立っている。ハンバーガーを食べながら話しかかっている。テラスには子供たちに何か注意するように声をあげた。向かいに座つていていたアメリカ人の女性が、子どもたちに何か注意するように声をあげた。向かいに座つていたアメリカ人の女性が先に象の乗り物にまたがり、三歳くらいの弟がコインを入れた。男が振り向いて、笑いながら子どもたちを見る。家族連れで移駐してきた米兵の夫婦だらうと思つた。五歳くらいの少女が先に象の乗り物にまたがる。少女が声をあげて笑い、店のドアを開けようとしたカツヤが上手しながら前後に動き始める。少女が声をあげて笑い、店のドアを開けようとしたカツヤに手を振つた。

やいふに十一年近く前の記憶がよみがえつた。兄たちの夏休みも終わりに近づいた頃、家族で北部のビーチに遊びに行つた。そいつに同じ乗り物があつた。カツヤは少女を見上げている男の子と同じで、姉に抱えられて象の乗り物に乗つた。耳の下についた取っ手を握らせ、姉はしきりかまえていつか注意した。一人の様子を両親と兄たちが笑いながら眺めて、父がカメラのシャッターを何度も切つた。姉がコインを入れると、乗り物が動き出し、カツヤは声をあげて笑い続けた。

男の子が、早く代わつて、といふつて少女の足を叩いている。少女はそれを無視して、カツヤに笑いかける。少女の上気した笑顔の美しいのに、カツヤは思わず目をそらし、店に入つた。

カツヤーでソーパーとホーリーを掛けたりで注文し、金を払って一階にあるトイレに行つた。個室に入り、カツヤーはアメイブして兵器の状態を確かめる。血が渗んで止まっているのを確かめてから個室を出た。トレイアーバーに包んだガゼをゴミ箱に捨て、頭を洗つ。右頬の傷のかさぶたが取れ、新芽のよつなか艶を持った新しい皮膚が現れていた。それから、おもむろに腰に手を振つて、少女の姿はなかつた。階段を降り、カツヤーはカウンターで持ち帰りの品物を受け取つた。店を出て遊び場の方を見られたら父親が居直るときに使う言葉だつた。

に追及された父が、居直るときに使う言葉だつた。見られたらどうか、と、象の乗り物には男の子が乗つていて、少女の姿はなかつた。テーブルに座つている両親は話に夢中で、男の子が手を振つていても気につかない。小さなゴムボールが一杯入つた三三二、ハウスの中で子どもたちが遊んでいて、大声で騒ぐ声が屋根の下に響いてる。沖縄人の家族は警戒して、まわりに気を配りながら車に戻つた。

ドアを開けると、カツヤーは運転席に座り、助手席にセカンドバッヂとハッパーガード飲み物が入った紙袋を置いた。次の瞬間、体の中心を鋭く冷たいものが貫いた。マユの姿を探して後

部座席を見ると、外灯の光を受けて青白く浮かぶマユの顔があつた。薄く開かれた目がカツヤーと潮の匂いを感じた。濃い塩分と海藻の匂いが混じた潮の匂い。マユの左手が膝の上に乗つた少女の表裏色の髪をなでていて。髪に覆われて少女の顔は見えない。右手にはアーマーナイフが握られていて、切っ先から血がシートに垂れる。後部座席の床に、流れ落ちた血が溜まつていて。潮の匂いはそいから漂つていた。マユの目が開き、瞳の奥で何かが動いた。

「さうさせよ、タス」
車を出した。対向車のライトが眩い。アクセルを踏み込みながら、カツヤーは頭が混乱して状況を整理しきれなかつた。これ以上何も考えくなかった。虹の鳥を見たい、それだけを念じ続けた。

夜の森の奥に裸のマユが立つていて。露に濡れた木々や草の葉、腐葉土、森に棲む生き物たち、それ全ての匂いが森の冷気に溶められ、マユを包む。白い体がしつとり濡れてい

る。固い種子が割れ、新芽が芽吹くように火傷の傷が消えて、新しい皮膚が現れる。青や緑の

羽毛に継取られた雑色の顔。金色の虹彩と漆黒の瞳が夜の森を見る。鋭い嘴が開き、鳥の鳴き声がこだまする。樹間に差し込む月の光がマユの体を照らし出し、毛づくばりながら左右の手の動きに合わせて、肩胛骨の上の翼が羽はたを始めた。羽音がしたいたい大きくなり、エーフの背中を離れた鳥は、七色の光を放ちながら夜の森を舞つ。

この後ろに立つて、虹の鳥を見上げるカツヤの背後に、森の闇やはり深い黒が近寄る。

喉にアーナナツが当たられる感触に、カツヤは目を閉じる。

そして全て死に果てねばいい。

体奥から笑いが込み上げてへ。バシタツツーに映るエの横顔は美しいかった。アクセル

目取真 後 (めどるま しゅん)

1960年、沖縄県今帰仁(なきじん)村生まれ。

琉球大学法文学部卒業。

著書『沖縄「戦後」ゼロ年』(日本放送出版協会、2005年)

『風音』(リトルモア、2004年)

『平和通りと名付けられた街を歩いて』(影書房、2003年)

『沖縄／草・根の意志』(世織書房、2001年)

『群蝶の木』(朝日新聞社、2001年)

『魂込め』(まぶいぐみ)(朝日新聞社、2000年／朝日文庫、2002年)

『水滴』(文藝春秋、1997年／文春文庫、2000年)

定価 一、八〇〇円+税

落丁・訛丁本はおとりかえします。

©2006 Medoruma Shun

製本=美行製本

表紙印刷=形成社

本文印刷=新栄堂

落丁・訛丁本はおとりかえします。

元振替 〇〇一七〇一四一八五〇七八

URL=http://www.kageshobo.co.jp/

E-mail=kageshobo@md.neweb.ne.jp

FAX 〇三(五九〇七)六七五五

電話 〇三(五九〇七)六七五五

〒114 0015 東京都北区中里三一四五

発行者 松本昌次

発行所 株式会社 影書房

著者 目取真 俊

一〇〇六年六月二三日 初版第一刷

虹の鳥

「小説トリツ」2004年冬季号(朝日新聞社)

初出誌